

ラッコと「夷酋列像」

—19世紀の北太平洋世界とアイヌの人びと—

横山 百合子

ラッコは、子どもたちに人気の動物。お腹の上に石をのせ、貝をぶつけておいしそうに食べる姿や、流されてはぐれないように手をつないで眠る姿は、テレビやユーチューブの画像でも親しまれています。何を隠そう、私も子どものころからラッコファン。PCのアイコンはラッコ！です。学び舎の教科書では中世の北方史のページにラッコの写真が登場するのに気づいて、うれしくなりました。

しかし、歴史学習でラッコを取り上げるなら、中世とならんで、ぜひもう一つ取り上げてほしい時代があります。それは、18世紀末の日本と世界—寛政改革期の北方問題とクナシリ・メナシの戦いの時期です。ラッコ、アイヌ、寛政改革、長崎貿易がひとつながりになって、北太平洋の世界史と絡み合い、歴史に姿を現してくるからです。

1 「夷酋列像」の発見—12人のアイヌ首長の肖像—

少し話が飛びますが、「夷酋列像」というアイヌの首長12人を描いた肖像画をみたことがあるでしょうか。1789年、アイヌの人びとが、松前藩の圧政に抵抗してクナシリ・メナシの戦いを起こした際に、松前藩に協力したアイヌの首長たちを描いた12枚の肖像画です。この絵は、長い間行方が分からなかったのですが、1984年、フランスのブザンソン美術館に所蔵されていることがわかり、当時、大きな話題となりました。近年も、2015年9月から2016年5月にかけて巡回展「夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界—」が開催され、ご覧になった方もいることでしょう(1)。「夷酋列像」は、1789年、クナシリ・メナシの戦いが起きた時の藩主松前道広の弟で、画家でもあった蠣崎波響が描いたものです。日本では函館市中央図書館に蠣崎波響が描いた「夷酋列像」の内、イコトイ

とシヨンコの2枚の絵などが残っています。

クナシリ・メナシの戦いは、和人にもらった酒を飲んだサンキチというアイヌが急死した事件をきっかけに、クナシリから対岸のメナシ地方のアイヌたちが蜂起した事件です。蜂起勢は、クナシリ島の運上屋を襲って22人の和人を殺し、さらに対岸の蝦夷地メナシ地方に渡り、番屋と和船の乗組員49人の殺害に至りました。



図1 御味方蝦夷之図 イコトイ 函館市中央図書館蔵

松前藩は、アイヌの有力首長らの助力を得て、37人のアイヌを集めて殺害し、事件は悲劇的な結末を迎えることになりました。

戦いが起きたクナシリ・メナシ地方は、道東有数の良質の漁場であり、戦いが起きた18世紀末には、藩が松前藩出入りの有力商人にその経営を任せる場所請負制が行われていました。クナシリ・メナシの戦いの直接の原因はサンキチの事件にありましたが、その背景には、場所請負制の下で、日常的に行われる和人の差別的・暴力的な言動や、アイヌ女性への性暴力など、抑圧的な支配への怒りが

あり、それが噴出したのです。藩は鎮圧隊を派遣し、有力アイヌ首長の力を借りて蜂起を押さえていきました。

「夷酋列像」に描かれたのは、このとき、藩に協力し松前の”御味方”とされたアイヌの首長たちです。しかし、首長たちは、積極的に蜂起勢を鎮圧しようとしたわけではありませんでした。首長たちは、事件発生後、蜂起勢を呼び集めますが、それは、松前側が、自首すれば生命だけは助けるとほのめかしたためともいわれています(2)。しかし、呼び集められた、メナシ地域の 131 人、クナシリ地域の 183 人、合計 314 人のアイヌのうち、取り調べによって 37 人が和人殺害に関わったとして入牢、翌日、死刑が執行されることになりました。鎮圧隊は、牢から一人ずつ引きずり出して斬首していきましたが、5 人目の処刑が終わったところで、牢内が騒がしくなり牢を打ち破ろうとする勢いとなったため、鎮圧隊は、鉄砲、槍、刀で残る 32 人全員を殺害し、首をはねて塩漬けにし、松前に運んだのです。

戦いが終わった後、松前藩は、“御味方”の首長たちを松前まで呼び寄せ、藩主にお目見えのうえ、凱旋行列にも参加させました。松前行きを承知しなかった首長もいますが、波響は、この時期に、藩の“御味方”アイヌである有力首長たちを、異様な迫力を感じさせる緻密な技法で描いたといわれます。

「夷酋列像」にみる首長たちは、豪華なロシア風のマントやブーツを身につけたクナシリの首長ツキノエ、蝦夷錦をまとったアツケシの弓の名手シモチ、ラッコの毛皮を敷き蝦夷錦をまとってすわるウラヤスベツの首長マウタラケなど、勇壮で豪華な衣服をまとっていますが、実際にアイヌ首長たちがそのような身なりをしていたわけではありません。また、その白目をむいた表情は、どこか異様で、人間らしい感情を感じにくいものです。12 人のうちただ一人の女性チキリアシカイは、65 歳になる一族の実力者で、列像に登場するツキノエの妻、イコトイ（アツケシの総酋長）の母でもありますが、一方で、蜂起勢の一人として殺害されたセツハヤフの母でもありました。その表情から、悲しみと怒りを読み取る研究もありますが、その表現はそれほど明確ではありません。また、本稿では首長たちの名前をカタカナで表記していますが、列像では、贖殺＝ジョンコ、訥室孤殺＝ノチクサなど、「殺す」「訥〔ども〕る」などの印象の悪い漢字が多く使われ、

“御味方”アイヌといいながら、信頼や友誼を背景にして描かれたものとも考えられません。

では、波響は、なぜこのような絵を描いたのでしょうか。波響は、幼い頃から画才を発揮し、南蘋派〔なんぴんは〕と呼ばれる細密な写生技法を学んでいましたが、「夷酋列像」創作の意図を直接に語る資料は残されていません。しかし、絵が完成すると、波響は、藩主の命により絵を携えて京都にのぼり、京の文人・画家たちと交流し、最後は「夷酋列像」を当時の光格天皇の上覧に供しています。この頃、アイヌの反乱を招いた松前藩の失政は、致命的な失策として幕府から追及を受けていましたから、松前藩が屈強で豪勇なアイヌ首長を従えていることを見せつける絵は、藩のアイヌ統治能力を誇示する役割を果たしたのかもしれない。

このような「夷酋列像」をめぐる当時の政治的背景についてはさらに研究が必要です。しかし、ここでは、そのような幕府や藩の動きではなく、アイヌの人びとの動きについて考えてみたいと思います。たとえば、もっとも有力な首長として知られるツキノエは、幕府老中からも一目置かれたほど知られた人物でしたが、戦いが鎮圧されたのち、アイヌの仲間たちから命を狙われ続けたといわれます。クナシリ・メナシの戦いは、虐殺という悲劇的な結果に終わっただけでなく、アイヌ社会のなかにも大きな衝撃を残しました。道東のアイヌの人びとは、なぜこのような状況に追い込まれたのでしょうか。また、「夷酋列像」に描かれた首長たちは、なぜクナシリ・メナシの戦いに際して松前藩に協力する姿勢を見せたのでしょうか。

2 高価なラッコ毛皮

実は、事件の背景には、ラッコの存在がありました。ラッコは、思ったより大きな動物です。図2は、東京大学総合博物館の遠藤秀紀氏に見せてい



図2 ラッコの毛皮

ただいた、水族館にいたラッコの毛皮ですが、机の大きさと比較してみてください。ラッコ皮はつややかで暖かく、黒テンに勝るともいわれ、実際にさわってみると、ふかふかで厚みのある毛皮は、なんともいえない手触りです。18世紀の終わり頃、アツケシあたりでは上等のラッコ毛皮は一枚銭37貫余と、アザラシ皮の500倍以上の値がつき、米60俵以上に相当する値段で取引されました（最上徳内「蝦夷草紙別録」）。

明治になってからも、全国の産業振興を図るために西南戦争の最中に開催された第一回内国博覧会では、北海道の物産の一つとしてラッコ毛皮が出品されました。当時ラッコ毛皮は、相当に人気があったとみえ、油彩画で著名な画家高橋由一の「花魁」に描かれた遊女小稲の着物の襟はラッコ毛皮のように見えますし、政商五代友厚も、ラッコ毛皮を愛用していたのか、友人から「ラッコ皮下〔ひか〕」（ラッコさま）とからかわれたりしています（3）。



図3 大日本物産図会 千島国海獺採之図 国立歴史民俗博物館蔵

博覧会の宣伝に作られた錦絵（図3）には、「全体革を以て造し、鯉節形なる

船に体に入るべき程の穴を三ヶ所穿け、舟乃中へ水の入らぬやう穴よりつゞく皮をからだに結付、一人は櫂をもち兩人もりにて海上に浮む海獺〔ラッコ〕を突とるなり」と記されています。これは、ラッコ島とも呼ばれたウルップ島に当時暮らしていた北方民族アリュートの皮舟によく似た獺の説明です。江戸時代のアイヌがここに書かれたような皮船を用いたかどうかはわかりませんが、北の海でのラッコ獺は、大変難しいものだったことでしょう。夷酋列像に描かれたアツケシの首長イニンカリは、事件の数年後の1798（寛成10）年、ラッコ島でのラッコ獺の帰途、エトロフの海で風波に遭い、転覆、溺死したとされ（国立民族学博物館蔵「夷酋列像図詞書」）、ツキノエも、クナシリ・メナシの戦いが起きたとき、ラッコ島に滞在しており、事件の知らせを聞いて17～18艘の船を引き連れてクナシリに急行したと記録されています。ツキノエのラッコ島滞在が、交易のためなのか獺のためなのか不明ですが、当時ロシア人などが毛皮などを求めてラッコ島にも来ることもあり、ツキノエの滞在がラッコ毛皮と無関係だったとは考えにくいでしょう。

では、このようなラッコ毛皮と、クナシリ・メナシの戦いはどういう関係にあったのでしょうか。

3 ラッコ毛皮の行方

これまで、ラッコ獺が道東のアイヌ首長たちの経済的力をささえていたのではないかという指摘はなされてきました。しかし、アイヌたちが獺によって入手したラッコ毛皮が、誰の手に、どのようにして渡っていったのかは、ほとんどわかりません。しかし、それを窺わせる資料もいくつかあり、それをご紹介します。

一つは、「倭漢三才図会（和漢三才図会）」という、1713（正徳3）年に出版された図解付の百科全書のような本の記述です（「倭漢三才図会」第三十八獣類、図4）。

これには、ラッコについて、次のように書かれています。

蝦夷島の東北の海中に、島あり。獺虎島と名づく。此の物多くこれあり、常に水に入りて、魚を食ひ、或いは島に出て奔走す。疾きこと飛ぶが如し。大き

さ野猪〔イノシシ〕に如くして、頸短く、また猪頸〔イノシシノクビ〕に似たり。脚矮〔ミジカ〕し。島人皮を剥き、蝦夷人を待ちて交易す。その毛、純黒、はなはだ柔軟にして、左右これに靡〔なづ〕るに、順逆なし。黒き中に白き毛少し交じるは、官家の褥〔しとね〕となし、その美、これに比する者無し。値、最も貴重也〔ナリ〕。



図4 倭漢三才図会 第38巻獣類 国立国会図書館蔵

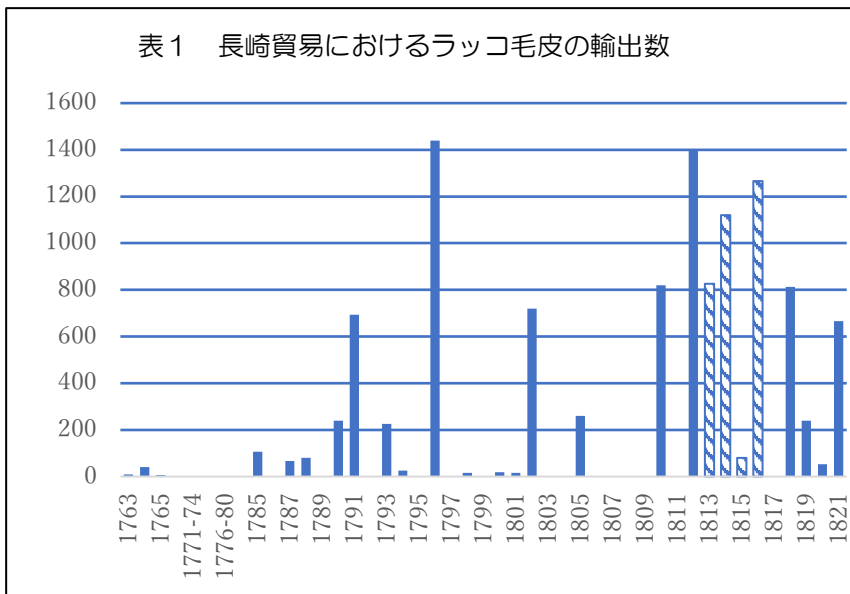
其の全体、生きてる者を見る人無し。皮の形を以て之を察するのみ。其の皮、長崎に送りて、中華〔モロコシノ〕人争い求む。疑うらくは、此れ本草綱目に、所謂木狗の属なり。

ラッコ毛皮はあまりにも滑らかで自在になびくので、ラッコのようだというと、信念がなく誰にでもなびく人という意味もあったといいますが、毛皮の美しさとその特徴をよく捉えた記述です。陸上を疾走するとか、木狗（もつく。広東省などにいる獣類）の仲間であるなど、多少誤った情報も含まれていますが、きわめ

て高値で中国人の人気が高く、長崎から中国に輸出されて（裕福な）官家のベッドで使われたという部分は注目されます。

「倭漢三才図会」は18世紀初めに成立したものですから、この記述に従えば、この頃は、アイヌ自身が猟をするのではなく、アイヌがラッコ島に行き交易によって入手したとも思われます。しかし、入手した毛皮をアイヌの人々が直接長崎に持って行くことはあり得ず、松前藩か、その配下の商人の手によるとみなければなりません。ラッコ毛皮は、千島列島から、アイヌ—和人の手を経て、長崎を経由して中国に移出されていたのです。

では、ラッコ毛皮は、どのくらい輸出されたのでしょうか。長崎から中国に移出した貿易品については、「倭漢三才図会」の時期より後の18世紀後半から19世紀第1四半期頃のリストが残っています。これを復元した貴重な研究(4)を見ると、その中には、ラッコの毛皮も含まれています。



*棒線は輸出ラッコ毛皮の枚数。シマ線は俵数。1俵の枚数は不明

(永積洋子編『唐船輸出品数量一覧:1637~1833年 復元唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳』創文社 1987年、高橋周「近世日本のラッコ皮輸出をめぐる国際競争」川勝平太編『アジア太平洋経済圏史 1500-2000』藤原書店、2003年より作成)

表1のグラフは、このデータをもとにしたものですが、ここからは、ラッコ毛皮の輸出が、18世紀後半のいわゆる田沼政治と呼ばれる頃から積極的に展開され、多い年には1000枚を超えていたことがわかります。クナシリ・メナシの戦いの後の1795～1796年には1420枚のラッコ毛皮が輸出されました。もちろん、その利益が十分に道東アイヌに還元されたとは到底考えられず、またアイヌの人びとが毛皮の行方についてどれほどの情報をもつことができたのかもわかりません。しかし、「鎖国」による貿易統制と海外渡航禁止のもと、ラッコ毛皮をどったり交易によって手に入れたりすることはアイヌにしかできません。その毛皮を松前藩あるいは和商人に提供することで、アイヌの人びとが新たな経済的可能性を感じとったという側面も考えられるのではないのでしょうか。

4 北太平洋に展開する毛皮貿易

それにしても、18世紀後半、ラッコ毛皮の輸出はなぜそれほど急に発達したのでしょうか。その背景には、北太平洋地域における新たな開発と、そこに暮らす先住民との葛藤という動きがありました。ここでは、各国の動きを簡単に見ておきましょう。

ロシアは、毛皮を求めてシベリア開発を進め、その動きは18世紀はじめにはユーラシア大陸東岸カムチャツカ半島に及んでいました。1760年代後半には、カムチャツカ政庁は北千島で毛皮徴税を試み、エトロフ島に到達しますが、その過程では、アイヌとロシア人の激しい戦いが起こり、双方に多数の死者が出ました。1770年代には、ロシア側もこのような強行策から和平的な交易に方針を切り替え、1792年のラクスマン根室来訪に至ります。一方、1783年、毛皮商人シェリホフの探検隊は、シベリアからオホーツク湾をこえ、カムチャツカ半島南端からアリューシャン列島をへてアラスカに到達しました。

イギリスの動きも、北太平洋の状況を一変させます。1779年からのイギリスのジェームズ・クック（通称キャプテン・クック）艦隊による三回目の北太平洋沿岸航海によって、カムチャツカからアリューシャン列島、北米北西岸の毛皮が中国市場においてきわめて有望な商品であることが知られ、インド、中国と北米西海岸をつなぐ太平洋横断ルートが脚光を浴びるようになります。それらの船

は、日本列島にも接近し、1791年には、博多湾に、ラッコ毛皮を積んだ中国行き
のイギリス商船アルゴノート号が来港し追い払われています。アルゴノート号は
そのような北太平洋沿岸からインド・中国にかけての毛皮集荷・販売の先兵だっ
たのです。イギリスは、カムチャツカからアリューシャン列島を経てアラスカに
いたる北太平洋海域の毛皮独占をねらい、北米のヌートカ（現在のバンクーバー
付近）に毛皮貿易拠点を築こうとしていました。また、それまでヌートカに足場
を築いていたスペインとの対立も起こりました。

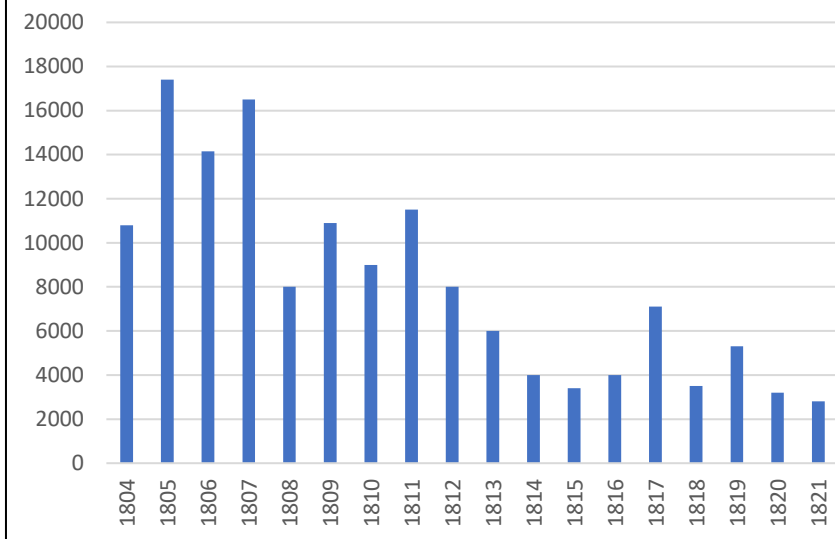
当時、日本貿易を独占していたオランダは、このようなイギリスの動きに、神
経をとがらせ、情報の収集に躍起となっていました。

一方、アメリカも、北太平洋の毛皮に注目していました。コロンビア号、レデ
ィ・ワシントン号の2艘のアメリカ商船は、アメリカ東海岸ボストンを出発し
て、大西洋を南下し、南米の南端ホーン岬を越えると、今度は太平洋を北上して
ヌートカ（バンクーバー）に至り、北太平洋のラッコ毛皮を満載して中国で売り、
インド、アフリカ南端を経てアメリカ東海岸ボストンに帰着する世界一周の貿易
航路を、最初に開拓した船でした。このルートは、その後、北太平洋、広東、ボ
ストンの3カ所で大きな貿易利益を上げることのできるゴールデンルートとし
て、脚光を浴びます。レディ・ワシントン号については、売れ残りのラッコ毛皮
200枚を積んで、1791年、日本の紀州串本付近に到着し、地元の村人たちと交
流、測量などを行って帰国したことが、『南紀徳川史』に記録されています。

北太平洋全体で毛皮貿易がどのくらいの規模で行われたのかはわかりません
が、アメリカから中国に輸出されたラッコ毛皮の数については、表2のような数
値が残されています。北太平洋における毛皮貿易の主役はラッコだったとみてよ
いでしょう。

こうして、毛皮貿易が世界を一周する航路開発の動因となり、それまでの北太
平洋沿岸先住民による島づたいのささやかな毛皮交易は、様相を一変すること
になりました。ユーラシア大陸北東から北太平洋沿岸、アラスカ、北米地域沿岸の
先住民や千島のアイヌの人びと、そしてラッコたちも、この動きにまきこまれて
いくことになったのです。

表2 アメリカの対中国輸出ラッコ毛皮数



出典 高橋周「近世日本のラッコ皮輸出をめぐる国際競争」

5 「夷酋列像」と“涙の旅路” —世界史のなかの和人とアイヌ—

このように見てくると、松前藩と和商人の支配のなかで、アイヌの人びとが、蜂起する者と松前藩の“御味方”に分かれ、しかも、“御味方”とされた人びとは、和人とはまるで異なる異様な風貌で描かれたことの背景も浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

アイヌの生命や誇りを踏みにじる松前藩や和人の横暴な支配に対して、どう対処するのかという問いに正答はありません。生命を懸けた抵抗が悲劇に終わる一方、松前藩の支配、あるいはロシアのもとで毛皮生産の道を選んだとしても、それがアイヌの育んできた暮らしや文化を保障するものではないことは、北太平洋地域の先住民族たちの経験からも想像できることです。しかし、そのような厳しい状況下で、ラッコ毛皮が大きな意味をもった世界史の動向を感じ取り、そこに足場を置こうとする選択もありえたことでしょう。描かれた首長たちが、我が子まで参加している蜂起勢の心情を、理解していなかったはずはありません。しか

し、そうかといってそれに同調することもできないという、葛藤と困難な選択を迫られたとも考えられます。

「夷酋列像」は、政治的な意図のもとで描かれたものであり、絵を解釈することにはさまざまな難しさがあります。絵の中のアイヌと実際の姿は大きく異なり、その屈強さは政治的意図によって故意に強調されたものかもしれません。しかし、和人がアイヌたちを完全に意のままに動かすことはできなかったというのもまた歴史的事実です。松前藩家老も務めた蠣崎波響が、無意識のうちに感じる底知れぬ畏怖が、「夷酋列像」に現れていると考えるのは、読み込みすぎでしょうか。

振り返ってみると、学び舎教科書には、北米先住民のイロコイ族やチェロキー族のたどった歴史についても丁寧な記述があります。西欧の近代国家との対峙を余儀なくされた先住民たちが、白人による独立戦争や西部開拓に直面し、葛藤のなかで政治的な経験を積み自立への努力を重ねていったこと、“涙の旅路”と呼ばれる移住を迫られたチェロキー族のように、苛酷な経験を強要されていったことなどが記されています。子どもたちは、その歴史から考える手がかりをたくさん得ることでしょう。教科書の執筆者の一人山田麗子氏は、この題材の執筆意図を説明するなかで、独立戦争の緊迫のなかで政治的立場の選択を迫られたイロコイ族の青年たちの苦悩と決断を物語る映画「ブローケン・チェーン」を紹介し、先住民の経験を深く理解することの大切さを指摘しています(5)。

本稿で述べてきたアイヌ民族と北米先住民を比べれば、その人口や、置かれた歴史的環境、政治的経験の違いなど、相違点はたくさんあります。しかし、クナシリ・メナシの戦いとその後の経過には、北米先住民の人びとが経験した葛藤や苦悩、その結果として強要されていく”涙の旅路”にも通じるものがあるのではないのでしょうか。

ラッコは、アイヌ語がそのまま日本語となった数少ないことばです。子どもたちが、ラッコへの関心から、アイヌの人びとの暮らしや文化、さらに先住民を含む日本と世界の関係などに関心を広げていくことができれば、大変うれしいことです。ここでは、「夷酋列像」に描かれたアイヌ首長たちとラッコを切り口として一八世紀末の歴史をご紹介しますが、何に焦点を絞り授業で扱うかにつ

いても、さまざまな可能性があるでしょう。今後の研究と授業実践に期待しています。

【注】

- 1 2015年から2016年にかけて、北海道博物館（札幌市）、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）、国立民族学博物館（大阪府吹田市万博公園）で巡回展が行われた。実際の画像については、同展示の図録『夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』や下記のウェブサイトを参照してほしい。
https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/special/old/room4_2015/index.html#ishuretsuzo（国立歴史民俗博物館）
<http://archives.c.fun.ac.jp/fronts/thumbnailChild/scrollframe/be000814>（函館市中央図書館）
- 2 菊池勇夫『十八世紀末のアイヌ蜂起—クナシリ・メナシの戦い』サッポロ堂書店、2010年。
- 3 「五代友厚関係文書」R4-85。五代宛ての手紙の宛名に添える脇付に、「虎皮下〔こひか〕」という通常使う語をもじって「ラッコ皮下」としたものがある。
- 4 永積洋子編『唐船輸出品数量一覧：1637～1833年 復元唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳』創文社、1987年。
- 5 山田麗子「問いを生み出す学び舎中学歴史教科書」『歴史評論』804、2017年

【参考文献】

横山伊徳『日本近世の歴史5 開国前夜の世界』吉川弘文館 2012年

18世紀後半から19世紀前半の歴史を、日本国内の政治史と北太平洋世界の成立の視点から、アイヌ民族など北方先住民を含む歴史として通観した初めての画期的研究。一般書として読みやすく書かれており、本稿では、これを参照した。

菊池勇夫『十八世紀末のアイヌ蜂起—クナシリ・メナシの戦い』サッポロ堂書店 2010年

クナシリ・メナシの戦いを軸にアイヌと和人の関係を詳細に分析したもの。

読みやすく、史料も豊富。

図録『夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界—』北海道博物館・国立歴史民俗博物館・国立民族学博物館 2015年

冒頭で紹介した夷酋列像の展示に際して作られた展示図録。年表や解説も充実（ただし、完売）。

大塚和重『『夷酋列像』から読む道東アイヌの経済的ポテンシャル』佐々木史郎 他編『東アジアの民族的世界—境界地域における多文化的状況と相互認識』有志舎 2011年

「夷酋列像」とアイヌ民族の経済的自立の問題を指摘したもの。

佐々木利和『アイヌ絵誌の研究』草風館 2004年

アイヌの人びとの日常の暮らしを、絵画資料から読み解いた詳細な研究。

図録『ラッコとガラス玉：北太平洋の先住民交易』国立民族学博物館 2001年

北方先住民の展示図録。カラー図版も数多く掲載され、イメージが広がる。

手塚薫『ものが語る歴史シリーズ23 アイヌの民族考古学』同成社 2011年

考古学から見たアイヌと北方先住民の歴史。ラッコ猟やウルップ島についての紹介がある。

榎森進『アイヌ民族の歴史』草風館 2007年

アイヌ民族の歴史についての詳しい通史。

下山晃『毛皮と皮革の文明史—世界フロンティアと掠奪のシステム—』ミネルヴァ書房 2005年

原始から現代までの毛皮をめぐる世界史。興味深いエピソードが多く、北太平洋世界の成立についても詳しい。

(元国立歴史民俗博物館)

『「ともに学ぶ人間の歴史」授業ブックレット No. 7』より